OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	秋田からのデザイン史研究
Author(s)	天貝, 義教
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

秋田からのデザイン史研究

天貝義教／秋田公立美術大学

はじめに

筆者は秋田公立美術大学においてデザイン史に関する講義を複数担当しているが，それらの講義のバックボーンは，ICDHS（the International Committee for Design History and Design Studies）に代表される国際学会における研究発表にあるといえる。ICDHSは1999年にバルセロナにおいて最初の会議を開催し，2016年に台北で第10回目の会議を開催してきた。筆者は，2002年のイスタンブル，2008年の大阪，2010年のブリュッセル，2012年のサンパウロ，2016年の台北での会議に参加し，イスタンブル，大阪，サンパウロ，台北において研究発表をおこなった。振り返るならば，それらの研究発表は，近代日本のデザイン史のアウトラインを明確にしようというものであり，近代日本における応用美術からデザインへという変遷を，とりわけデザイン理念の変化として記述しようとするものであった。筆者はICDHS以外にも，the Design History Society の Annual conference などでも研究発表をおこなっているが，ここではICDHSにおける発表の主要な論点を紹介してみたい。

1　第３回 ICDHS（主催校イスタンブル工科大学）

この会議で筆者は，Reconsidering the establishment of the Kobu Bijutsu Gakko: What did Bijutsu mean in the 1870s of Japan? と題した研究発表をおこなった。ウィーン博参同のさいにドイツ語の訳語としてつくられた「美術」という日本語の意味に焦点をあてたものであり，特に Kunstgewerbe というドイツ語の翻訳に「美術」という新語が使われたことに注目して，博覧会開催地ウィーンの Kunstgewerbe に関する博物館ならびに学校の設立目的と，東京の工部美術学校の設立目的を比較検討し，当時の日本において「美術」と呼ばれた分野の主要な役割が「百工の補助」にあったことを応用美術の思想の導入過程として論じた。この発表にもとづいて，The Kobu Bijutsu Gakko and the beginning of design Education in modern Japan.（Design Issues, Vol. 19, No. 2, Spring 2003. pp. 35–44）と「工部美術学校再考 ── デザイン史的観点から ──」（日本歴史学会編集「日本歴史」第661号 平成15年（2003）6月号 pp.74–82）などの論文を発表することとなり，これらが筆者のデザイン史研究の発端となった。

2　第６回 ICDHS（主催校大阪大学）

この会議では，The first Japanese design regulations（Isho-jorei）and the idea of applying art to industry in Japan in the 1880s と題した発表において，ウィーン博のさいに現地の Kunstgewerbeschure に留学した平山英三の帰国後の1880年代後半における応用美術に関する啓蒙活動と意匠条例との関係について論じた。意匠条例の制定後に平山は意匠行政に携わるが，制定以前にゴットフリート・ゼンパーの様式論，ヤーコップ・ファルケのクンストゲヴェルベの美学，フェリックス・カーニッツの装飾論など，平山の留学当時ウィーンにおいて普及していた応用美術に

関する主要な理論書を部分的ではあるが翻訳紹介しており，これらは日本における最初のデザインの法である意匠条例の施行のさいに，広く意匠に関する一般的理解の普及に重要な役割を果たすこととなったのである。

3　第８回 ICDHS（主催校サンパウロ大学）

1890年代末から1900年代の初めにかけて日本では，東京美術学校，工業教員養成所・東京工業学校（後の東京高等工業学校），京都高等工芸学校において図案に関する専門的教育がおこなわれることとなるが，特に普通工業品の図案の研究を目指した平山英三と松岡寿による工業図案教育に注目して，Japanese industrial design concepts in the transition from the nineteenth to the twentieth century: with special reference to the Japanese industrial design educators Hirayama Eizo（1855–1914）and Matsuoka Hisashi（1862–1944）と題した発表をおこなった。当時，東京工業学校（後の東京高等工業学校）において教育されていた工業図案は，英語では industrial design として理解されていたことを明らかにしながら，その教育内容について，工業図案科長であった平山英三は普通工業品の美的価値の向上を考え，平山につづいて工業図案科長となった松岡寿は，すべての工業製品の美化をめざす汎美的な工業図案の考えをもっていたことを論じた。第一次世界大戦前に，工業図案科は東京美術学校の図案科と合併し，松岡の普通工業品に関する汎美的な工業図案教育は途絶えるが，松岡は，第一次世界大戦後に設立された東京高等工芸学校の校長となり，汎美的な工業図案教育を，経済的工芸を主張する教え子の安田禄造とともに工芸図案教育として新たに発展させることとなるのである。

4　第10回 ICDHS（主催校国立台湾科技大学）

京都にひきつづいて第一次世界大戦後に東京に高等工芸学校が設立されるにいたって，今日につづく工芸概念が普及すると考えられるが，Japanese concept of Kogei in the period between the first World War and the second World War と題し，特に昭和戦前期の工芸概念について論じた。そのさい，小池新二の著書『汎美計画』において指摘されている昭和戦前期の日本における工芸の変態的分裂という状況にもとづきながら，工芸一般とともに美術工業・産業工芸・民芸について，安田禄造による工芸全般に関する定義，高村豊周による美術工芸の定義，産業工芸については国井喜太郎，民芸については柳宋悦による議論を取り上げ，それぞれの特徴について論じた。特に美術工芸の活動に対して，産業工芸と民芸が対抗的な活動ととらえられていたこと，しかしながら，産業工芸と美術工芸が当時英語では industrial art と同じ言葉で理解されていたこと，さらに柳が，当初民芸の範疇にいれていた機械工芸を後に民芸から除外したこと，そして機械の美的研究の必要性が訴えられていたことなどを取り上げた。これらの工芸をめぐる議論が第二世界大戦後の「工芸」から「工業設計」，すなわち今日の意味でのインダストリアル・デザインへの転換の重要な契機になったのである。

おわりに

今後の課題として，昭和戦後期に広く普及したといってよい機能主義的なモダン・デザインをめぐって，特にその中核に据えられる「綜合（integration）」の思想について，1950年代から60年代にかけて出版された主要なデザイン雑誌にみられる論考を手掛かりにしながら，考察を深めてゆきたいと思う。